



ヒガンバナ

113 編はハレルヤ。で始まり ハレルヤ。で終わる賛歌です。読み人知らずです。面白いことに、主の僕らよ、主を賛美せよ(1) と、共に賛美を捧げるように勧められているのは、僕らです。僕とは身分の低いもの、召使い、雑用をする者、奴隷ですから、身分の低い者たちが歌う賛歌と言えます。主の僕らよ と呼びかけられているのは、この詩編のほかに、134、135 編と、三つだけです。また、後半に、詩人は女性ではないかと思わせる言葉がある珍しい詩編です。

前半は、身分の低い者の賛歌なのに、目の付け所は高く、広く、深く、遠く伸びていて、スケールが大きいと感じます。

今よりとこしえに／主の御名がたたえられるように。(2) と、神の永遠性を思うと同時に、従う者としても、賛美を永遠に捧げる思いを述べています。日の昇るところから日の沈むところまで／主の御名が賛美されるように。(3) と、天と地を見晴るかして、世界の果てで、あらゆるところで、隅々に、至るところで、朝から夕べまで、賛美が絶えないことを願っています。主はすべての国を超えて高くいまし／主の栄光は天を超えて輝く。(4) と、どんなに地上の国が大きく栄えていようと、主は国々を超越しておられるばかりか、天を超えておられると、賛美しています。わたしたちの神、主に並ぶものがあるろうか。主は御座を高く置き／なお、低く下って天と地を御覧になる。(6) と、比べられないほど、高い所におられる神が、なお、低く下って と、高い所にだけおられるのではなく、低い所へと視線が降りて、また、ご自身も低い所に降りて、低い所をご覧になると歌います。低い所にいるのは詩人、僕らです。彼らの祈り、願いは何でしょう。

弱い者を塵の中から起こし／乏しい者を芥の中から高く上げ(7) と、弱く、乏しい者を起こし、高く上げてくださると驚くべきことが起こると述べています。この言葉は預言者サムエルの母ハンナの祈り 弱い者を塵の中から立ち上がらせ／貧しい者を芥の中から高く上げ(サム上 2:8) と同じです。ハンナはさらに、高貴な者と共に座に着かせ と願っていますが、詩人は 自由な人々の列に／民の自由な人々の列に返してくださる。(8) と、普通の人間と同じように生きたいと祈っているのです。僕らの希望は自由に生きることです。子のない女を家に返し／子を持つ母の喜びを与えてくださる。(9) 子のない女は居場所がなかったのです。子のない母ハンナが神に誓って祈り、サムエルが与えられました。ハンナの賛美の祈りが、113 編に歌われています。子のない女 に言及しているのは、113 編だけです。女性のこの苦しみを男性は歌うでしょうか。ですから、詩人は女性ではないかと思うのです。低い所にいる人々の思いの丈が歌われている賛歌です。

『讚美歌 21』は 500「神よ、みまえに」 [讚美歌のページ \(rgr.jp\)](http://www.rgr.jp) を関連讚美歌としています。18 世紀の詩に、文屋智明(1942-)により「祈り」と題して曲がつけられました。「謙虚に、また素直な心で作曲させていただいた」と語っておられます。ジュネーブ詩編歌はリコーダーとビオラ・ダ・ガンバによる重奏です。

作曲・演奏
文屋 智明

<https://www.youtube.com/watch?v=imq1qaP8HU0&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=113>